

末黒野 昭和二十八年十月八日第三種郵便物認可(毎月一回発行) 平成二十一年十二月五日発行 第六十四巻第十二号 (通巻七六〇号)

# 末黒野

すぐるの



12月号  
(通巻760号)

甘田正翠名誉主宰  
追悼号



# 昼の虫

小川玉泉

みんみんの絶叫明けの闇を衝く  
玻璃ごとの夕焼歪み山の宿  
睡蓮の目覚めてをりぬ靴を干す  
風に乗る朝日を纏ふ秋茜

妻起きて見よ酔芙蓉二十輪  
病む妻へ急ぐ家路の秋夕焼  
尾と首を振って市道を石叩  
はや五十過ぎし三人子敗戦忌  
実父母の逝きて八十年盆の月  
街川の火影五彩や虫しぐれ  
五升釜残る民家の昼の虫  
政党の虚を見る眼欲し鬼やんま

# 遊行柳

松本三千夫

うす雲の逃げ足はやし盆の月  
目立屋のまだ住む路地や葉鶏頭  
虫時雨漁家のこぼせる灯の暗く  
崎鼻の桜もみぢや風啾々  
遊園地ゴジラが吐ける秋の雲  
猫じゃらし猫捨てるなの札立ちて  
糠雨の遊行柳の刈田かな  
秋陰や白河の関古碑留め  
コスモスに流れ定まる築場かな  
栗拾ふ与一やな場を視野に置き  
落鮎に川ゆっくりと曲りけり  
討たれたる様に眼を剝く捨案山子

# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）  
太字は推薦句

## 走馬灯

安齋久英

揚花火一番星を目指しけり  
盆僧の面輪海老蔵そのままに  
石階の百余を極む秋暑かな  
意に染まぬ妥協もときに走馬灯  
肩欠けし白露の月や白陀師忌  
秋気満つ箱階段の漆黒に  
這ひ上る霧の触れゆく道しるべ

## 秋夕焼

大橋伊佐子

里人の皆老いにけり木槿垣  
小糠雨音なく萩のこぼれけり  
森の声今朝かなかなを加へけり  
有磯海潮目さだかに秋澄みぬ  
秋夕焼濡れ髪しぼる海女二人  
大漁旗打ち振り島の運動会  
鹿鳴くや浅き眠りの旅ひとり



鉦 叩 岡田史女

穂を孕む風や白陀忌三郷忌  
赤とんぼ故なく里の恋しかり  
約束のゆびきりを児と鳳仙花  
賞味期限過ぎし乾パン台風裡  
声嘎れて一ト日こもりぬ鉦叩  
雲速く流るる二百二十日かな  
見舞はざりし悔残りをり夕ちちろ

謹禱 正翠先生

けさの秋 小倉正穂

よき話心の隅に草を引く  
晒したるふきん真白しけさの秋  
新涼や地にくつきりと箒の目  
あの写真機どうしたらうか鯛雲  
峡の日の移るに早し蕎麦の花  
柿の村原田泰治の絵のままに  
政権へかすかな期待敬老日

秋高し 乙坂きみ子

朝鶉の一声寺領貫けり  
去り状の残る古刹や萩の花  
水切りの石の波紋や秋高し  
荒草に秋の深みし川の風  
柳散る風やはらかき渡し跡  
秋風や松一樹添ふ海難碑  
火櫓の一輪挿しの秋の草

鳥渡る 菅野日出子

病床の師の安かれと夕ちちろ  
秋暑し鯉のあぎとふ濁り池  
参道を吹き抜く風や萩盛る  
鶉鳴くや縄のゆるびし釣瓶井戸  
啄木鳥や大樹のもとの力石  
雲間より現るる甲斐駒鳥渡る  
色かへぬ松や湖畔の酒造蔵

# 万 仞 集

田水沸き畦に傾く猫車  
城戸緑

反抗期ありし子と酌む新酒かな  
内藤庫江

雲照らし雲の内なる稲光  
高橋明

九月十五日三郷忌正翠忌  
戸田澄子

秋耕の今年限りと鋤を執る  
亀卦川菊枝

手品めく鋏さばきや松手入  
林美与子

天よりも池の月佳し絵筆とる  
吉村勝也

黎明の茜の空や鳥渡る  
岡野里子

空澄めり鳥居に嵌まる畝傍山  
中山良子

蕎麦の花山ふところの膨らめる  
大橋弘子

玉音てふ声忘るまじ終戦忌	岩上行雄
朝顔や連子の窓に処得し	倉橋千代子
昼ひとり差入れ届く栗の飯	男澤栄男
夜の早き海人の家居や轡虫	卯月十六
蕎麦の花父祖の拓きしなぞへ畑	高橋定峰
乗り易き形を選びぬ瓜の馬	波多野孝枝
秋草の覆ふ流れや堰の音	竹内涼子
逸早くつるぼの咲きて秋めきぬ	長井恵子
草々を活けてかなめの花芒	渡辺よし枝
庭仕事次を思案の夕端居	高橋光民

# 選後に

小川玉泉

九月十五日三郷忌正翠忌

戸田 澄子

奇しくも九月十五日は今年の甘田正翠名誉主宰と平成八年に他界された古宮三郷同人会長の忌になった。三郷氏は中戸川朝人主宰の「方円」の同人でもあった。作者は深い哀悼の心を事実を述べることによつて表白したのである。

秋耕の今年限りと鋤を執る

亀卦川菊枝

作者は九十九里海岸に近い浜木綿句会のため役を務めておられる。四月の定期大会にも参加された。まだまだ若いと見ていたが、畑作りも今年限りとは、意外や意外。感慨深く秋耕の鋤を振る作者。自愛を切に祈る次第。

手品めく鋤さばきや松手入

林美 与子

感性の衰えは五感の中で遅い方といわれる。今年九十歳になられた作者もわかりである。この句のように、松の手入れをする庭師の鋤の使い方をみて、その素早さを素直に手品めくと受け止められた感性は見事である。

天よりも池の月佳し絵筆とる

吉村 勝也

単に月と表現して季語に当てる場合は、中秋の月を指す。今年の名月は陰暦閏年の関係で十月三日。この句は盆の月と思われる。池面に映る満月の余りの美しさに、絵心の深い作者は、思わず絵筆を走らされたのである。(以下略)

田水沸き畦に傾く猫車

城戸 緑

真夏の穀倉地帯が目には浮かぶ。照り付ける太陽光線を受けて水田は沸くように温度が上がる。稲の成長にとつてはこの上ない暑さである。田圃の手入れに使われた猫車・一輪車が畦に傾いて、田仕事の厳しさを示している。

反抗期ありし子と酌む新酒かな

内藤 庫江

子を持つ親にとつて誰もが体験する悩みの反抗期。子供が自我に目覚めて親の言うことを聞かなかつたこの時期を経て立派に成長した今。親子で仲睦まじく新酒を酌み交わす情景は、感慨無量で作者の喜びが伝わる。

雲照らし雲の内なる稲光

高橋 明

俳句は凝視の文芸であることを示す作品。俄かに広がった遙かな雷雲。一雨来るなど見ていると、稲光が走つた。眩しい光である。しかし厚い雲に阻まれ、地上には届かない。上五中七に緊迫感と雷雲の広がり早さが窺える。

# 巨林抄

敗戦の旗指物か破れ芭蕉	北岳や含みて甘き岩清水	秋めくと水際の草の葉擦れかな	学習田案山子揃ひの野球帽	新涼やししゃきししゃきと鳴る裁ち鋏	朝霧や墨絵めきたる白川郷	子と客の杓子定規や夏座敷	宇宙まで荷を送る世や昼の月	うそ寒や吉良邸跡のなまこ壁	露ゆれて蓮の葉どこも濡れてゐず	狂ふ程咲いて白 <sup>お</sup> 粉 <sup>ろ</sup> 花 <sup>い</sup> 紅ばかり	かなかなや子に促され骨拾ふ
小倉純	塚越弥栄子	山崎幸夫	土田亮	及川照子	古川敦子	三谷えい	半沢一枝	榊山智恵	鈴木俊孝	芝孝子	樺沢やすの